

東京多摩地区現代俳句協会

多摩のあけぼの

会報 No.152

多摩風土記（西武上水線）

西武鉄道玉川上水駅は、昭和四八年の拝島延伸まで終点であった。今尾恵介著「地図で読む戦争の時代（増補新版）」によると、「ここには日立航空機の工場があり、人員と資材運搬のため昭和一九年（一九四四）に急造、小川駅と工場間に敷設された専用鉄道であった」という。昭和二五年に西武上水線として営業開始、同二九年に電化された。（健介）



蕪村の句会を覗く

満田 光生

稲づまや浪もて結へる秋津島

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな

身にしむやなき妻の櫛を閨に踏

蕪村

いずれも蕪村の有名句。一句目は上空から秋津島（日本の古

称）を俯瞰した壮大な空想句。二句目は騎馬武者の写生句、三

句目は境涯句に見える。だが、二句目の「鳥羽殿」は平安時代

院政期に白河・鳥羽両上皇が鳥羽に造営した離宮、軍記物語

発想・絵画的構成の想像句だ。蕪村は晩婚で、蕪村の妻が亡く

なったのは蕪村没の三十年後、三句目は小説的な虚構の句であ

る。「俳句は私の詩」「俳句は写生」という近現代俳句的な読みは通用しない。そして、この三句は全て題詠句会での作である。

蕪村の生業は画家、若くして俳諧師・夜半亭宋阿（其角・風雪門）に入門したが、俳諧活動を本格化させたのは五十歳を過ぎてから、師の夜半亭を継承（二世）して俳諧宗匠となったのは五十五歳（数え年、以下同）であった。俳諧は本来連句を中心とするものだったが、蕪村の俳諧活動は題詠発句会を中心に行われた。その句会記録は四冊伝存し、『蕪村全集第三巻 句集・句稿・句会稿』（平成四年 講談社）に翻刻されている。その一部を紹介し、蕪村の作句工房を覗いてみたい。

この四冊には、蕪村五十一歳の明和三年から六十二歳の安永六年までと没年（六十八歳）である天明三年の句会を録する。宗匠立机以前は「三菓社中句会」と称する同好の士の集まりで不定期、月に何回も開かれることも多かった。明和七年に俳諧宗匠となつてからは、蕪村を指導者とする月並（月例）句会「夜半亭社中句会」となった。この他に、後に夜半亭三世を継

承する門人・几童（「春夜樓」と称し句会を主宰）の句日記・句会記録八冊（蕪村生前のみ）が伝存し、右の四冊には載らない句会の日付・題が知られる。

一 兼題

明和三年から明和七年の閏六月までは全て兼題のみの句会。現代では当り前の雑詠は、大正時代以降に広まったものである。

明和五年六月二十日の句会を覗こう。竹洞宅にて参会者六名。兼題「沢瀉」「扇」「鮎」「施米」「薰風」。「鮎」を掲げる。

かくぞあれ鮎に砂嚙む夜半の月

太祇

日黒みて鮎うち喰ふ河原かな

召波

朝風に鮎荷上れり供御の料

鉄僧

鮎釣て訪来ぬ君を松浦川

自笑

鮎はしるしたは蟹行流れかな

竹洞

鮎くれてよらで過行夜半の門

蕪村

太祇は京の花街・鳥原郭内に住む俳諧宗匠（手習師匠兼職）、召波は京の裕福な町人（黒柳清兵衛）で高名な漢詩人、共に俳諧史上に名を残す俳家。自笑は書肆・八文字屋（浮世草子「八文字屋本」版元）の当主、最も長期にわたり蕪村に師事した。

蕪村の句は有名句だが、自笑の句を受けての作と読める。

待っていた「君」が来て、釣った鮎を呉れて家には上がらずに帰ったという訳。掛詞を用い歌枕「松浦川」（佐賀県。神功皇后が三韓征伐の際に鮎を見て「珍しきもの」と言った説話あり）を詠み込んだ自笑の句に、蕪村は『蒙求』（兒童用の漢文初学書）「子猷尋戴」の逸話（大雪の夜、王子猷が友人・戴安道を舟で訪れたが、門の前で帰った）の俳諧化をもつて応じた。兼題であつてもただ持ち寄った句を出すのではない、蕪村の当意即妙の才がよくわかる。京市中の鴨川で鮎が釣れるかな？ などという詮索は無用。「君子の交わりは淡きこと水の如し」を、観念ではなく生き生きとした情景として描いた手腕が冴える。

二 探題

探題は句会当日に籤で引き当てた題で詠作すること。明和七年（蕪村五十五歳）七月一日の句会以降、蕪村の句会は兼題・探題併用となった。一つだけ籤を引き参会者全員が同題で詠作することもあるが、多くは各自が自分の引いた籤に記された題で詠作する。また、題は季語とは限らず、扇尽、職人尽、芭蕉七部集巻頭発句による句兄弟（巻頭発句を「兄」とし「弟」の句を詠作）などというものもある。

安永四年七月二十二日の夜半亭月並句会の探題は「百人一首歌」。その一部を掲げる。

我涙に月さへくらきわかれかな
萩枯て松にひびくや夜半の音
かけ稲に鼠鳴なる門田かな

几董
月溪
蕪村

二句目の作者・月溪は画家・松村呉春。蕪村に俳諧と南画を学び、のち円山応挙に私淑、詩情と写実を融合した画壇の大家。

几董句の題は「めぐり逢ひて見しやそれともわかぬ間に雲がくれに夜半の月かな」（紫式部）、月溪句の題は「吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ」（文屋康秀）、蕪村句の題は「夕されば門田の稲葉おとづれて葦のまる屋に秋風ぞ吹く」（源経信）。

几董句は久しぶりに会った人と別れた後の作者の悲しみを詠む。月溪句は山から吹き降ろす風で枯れた萩（視覚）から松籟（聴覚）に転じる。蕪村句は、門田には稲葉を吹く秋風の音ではなく掛稲を狙って群がる野鼠の鳴声が聞こえることよと、百人一首歌を俳諧化する。心情を詠む几董の正統的アプローチ、萩と松を配した月溪の絵画的構成に對して、蕪村句には笑いを誘う俳諧性が際立つのが興味深い。

三 百題発句

安永六年（蕪村六十二歳）夏・秋の二通の蕪村書簡に、社中で月並の「百句立発句」を行っていた旨の記述がある。百の題

で発句を一定制限時間内（一句につき線香が五分〓約一・五センチ燃える間）に作り、各々が百句を二時（約四時間）程で詠作する。蕪村は、初心者も制限時間内に百句満尾したと記す。伝存する句会記録には所載がないが、几董の同時期の句日記に「百題即案」「百題ホ句」等の記載があり、蕪村の発句書留『夜半叟句集』にも同題によると思われる句群がある。これらについての藤田真一氏（現関西大学名誉教授）と畏師・尾形仿先生の考証により、蕪村が「百句立発句」で詠作した句はほぼ明確になった（『蕪村全集第一巻 発句』平成四年 講談社）。冒頭に掲げた「身にしむやなき妻の櫛を聞に踏」もその一句だ。

薰風やともしたてかねつ巖島

蕪村

川狩や楼の人の見しり貌

いずれも百題発句での詠作。蕪村没後に上梓された『蕪村句集』にはそれぞれ「宮島」「鴨河にあそぶ」の前書があるが、これは題詠句を嘱目句と見せるための仕掛けである

以上、蕪村の句会の様子を急ぎ足でご紹介した。蕪村の句会は想像力の起爆装置だ。想像力は時空を超え、他人になることも出来る。「私の文学」「写生」を一度忘れてみるのが俳句をもっと豊かにするのではないか、と考える次第である。

あけぼの集

二荒山の後光となりぬ 鰯雲 八王子 青木 隆
 名月やこれから飲みにゆくのです 八王子 赤野 四羽
 旅靴しづかに拭ふ 晩夏かな 国分寺 秋山ふみ子
 富士が嶺に入日もたつく 大暑かな 多摩 足立喜美子
 ブレイキン 灼けし大地の気を躲す 小 平安達 昌代
 夏の草月 見る月が近づけり 清 瀬 穴原 達治
 帰り道ひとりひとりに 丸い月 稲 城 新井 温子
 源流の浅瀬 掠める黒とんぼ 八王子 荒川勢津子
 俳人のこころざしとや 敗戦忌 町 田 有坂 花野
 夏帽子 脱皮の出来ぬ男の子 狛 江 有原 雅香
 残暑急 北斎漫画の橋がかり 国分寺 安西 篤
 雷鳴や 四方に耳貸す 六地藏 足 立 飯田 和子
 秋うらら 呆けし姉の鳩 ポッポ 東久留米 飯田 玉記
 下 肢 太 ぎ 女 の 土 偶 豊 の 秋 多 摩 石 川 春 兎
 新涼のサロベツ 二十八基の風車 小 平 石橋いろり
 逝く人も生まれる人も 終戦忌 練 馬 石原 俊彦
 讚美歌の流れる窓辺 晩夏 光 青 梅 一ノ瀬 順子
 水売りといふ 商ひや 軒の下 狛 江 伊東 類

言の葉は今も直球 生身 魂 町 田 稲吉 豊
 見つめ返す マネの裸の オリンピア 町 田 今田 述
 きつねのてぶくろ 掌にひとつ 輪島の 盃 京 都 岩佐ひすい
 終戦進駐はまぼろし 立葵 武蔵野 内田 牧人
 燕帰る 軍港といふ 重き海 武蔵野 江中 真弓
 まねく灯や 踊りの 男女みな 頭巾 府 中 大井 恒行
 カレールの ぶどうぶどうぶどうと 原爆忌 府 中 大石 雄鬼
 子どもらの寝入つてからの ちちる虫 日 野 大槻 正茂
 淡々と 地獄の 映像 沖繩 忌 八王子 大谷みどり
 重心はぶれず 竜舌蘭の花 川 崎 大西 恵
 新盆や 蠟燭 点した また消して 三 鷹 大森 敦夫
 胸の 嬰眠り 長崎 忌の 黙 袴 昭 島 岡崎たかね
 コスモスや 砂川 闘争 ありし 駅 羽 村 岡村 直子
 巴里 遠く 兜虫の 夜の 明ける 三 鷹 小川 葉子
 紫陽花を 残して 去りつ 彌勒 かも 飯 塚 奥野 亜美
 風鈴の ガラスに 映る 朝の色 川 崎 尾崎 太郎
 抗はず 沈下 橋消ゆ 秋出 水 昭 島 尾関 英正
 AIは 付度まねる 残暑 かな 青 梅 小野こうふう

あけぼの集

身をよぢりよぢりて百合の散りにけり立 川片倉みちこ
 枝豆一皿つくづく「貧窮問答歌」日 野亀津ひのとり
 秋深し破れ障子の二三穴 西東京河 順子
 これ以上縮まないでよ羽抜け鳥立 川川島 一夫
 霧籠り言葉に化石あるとのみ大 田川名つぎお
 新涼の目覚め朝刊届く音清 瀬神崎 幸子
 この星の行方 閑かに蚯蚓干る小 平城内 明子
 しわしわの梅干し干す手匠の手大 田小泉満知子
 手には汗涙も混じえ観戦す三 鷹高坂 栄子
 昼顔や時々詩人時に夜風 西東京幸村 睦子
 暮れなずむ家並の彼方遠花火 八王子小竹ヒサ子
 この先へ行つてごらんと吾亦紅小 平後藤 行雄
 草取りの見知らぬ花を供花とす府 中小林 育子
 商店会無き街となる秋茜町 田小山 健介
 訥訥と生きて胡瓜の一本漬多 摩齐田 仁
 たらふく食ふ祖父の焼きたる八月の肉昭 島坂本 空
 ひまわりの種のひとつぶずつに愛 東久留米 佐々木克子
 夕焼の空に逆転ホームラン府 中笹木 弘

白桃や傷つきやすき親心府 中佐藤 栄子
 翅すこし余して止まるてんと虫調 布佐藤 茉
 にく筆の残暑見舞や栞とす昭 島佐藤 光子
 曲げわっぱふつくらかおる栗おこわ 八王子柴 れいこ
 汗かいて憂きことすべて忘れ去り杉 並島 彩可
 夕立ちを祈るてる坊主かな足 利清水 弘一
 初秋や亡母に似た皺いとほしむ 世田谷鈴木 浮葉
 応援の赤一色の酷暑かな立 川鈴木かずえ
 夏祭縁も遠くになりにけり小 平鈴木 寿江
 板の間の素足の感触秋が来た小金井鈴木 佑子
 初夏や嗣治の裸婦発光す板 橋諏訪部典子
 えごの花先き逝く人と遺る人小 平関 梓
 秋澄むや羽をたたんで眠る友調 布芹沢 愛子
 石段続くや日傘のぬくみ父母の墓小 平高瀬多佳子
 カマンベールチーズの溶ける熱帯夜 西東京高原 桐
 保証人印影にじむ秋暑かな清 瀬谷村 鯛夢
 味しめておんなじ言葉ジキタリス 国分寺玉井 豊
 熱き朝雲が湧き立つ九月一日稲 城玉木 康博

あけぼの集

もういいよなんて言うなよ種茄子日 野 玉木 祐
 良く冷えた西瓜地球の冷し方立 川 田村 明通
 黒くなり鳥目こぼす木守柿三 鷹 田山 光起
 敬老日われすでに世の忘れ物 武蔵野 津久井紀代
 長い小説もうこの辺りで終わりにしよう 八王子 辻 升人
 老いの道に寒蟬鳴くや悲別 八王子 都筑 遊
 六根を冷やしてくれし西瓜かな清 瀬 寺島芙美子
 国境は海中にあり渡り鳥立 川 遠山 陽子
 帰省子の光と風の通る部屋 西東京 戸川 晟
 さみしさもやさしさも知っている白桃杉 並 飛永百合子
 新涼や權の奏づる水の音平 塚 富山ゆたか
 列乱す疲れた蟻は脇へ寄る清 瀬 永井 潮
 日々生きて突如八月十五日立 川 中條 啓子
 曼珠沙華過去が豊かにする八十路 西東京 中田とも子
 金ぴかの鰹木りゆうと雁渡し 国 立 中野 淑子
 さわやかに消え去る夢もありにけり 座 間 長野 保代
 麦酒飲む今年三十路のつば九郎 府 中 中矢 温
 喉越しに北海の渦水頭膾 武蔵野 夏目 重美

木犀や日々新しき老いを知る町 田 成戸 寿彦
 プッチンプリンぷるりと落ち今朝の秋 国分寺 南行ひかる
 ひと雨に立つ桂の香月涼し 西東京 西川 五月
 夏至の日はやや濃くゴードンドライジン 昭 島 西村 智治
 落雷か隣家マンション非常ベル 世田谷 西前 千恵
 原爆忌核を造る手鶴折る手三 鷹 拔山 裕子
 天と地のあわひに垂るる凌霄花 八王子 沼田 博古
 蟬時雨散歩の刻を楽しくす三 鷹 根岸 敏三
 返されし強き握手や夕螢三 鷹 根岸 操
 夏空にあるはずのない雲探す小 平 野口 佐稔
 くせ強き地酒のあての衣被羽 村 野島 正則
 落葉松に凭る落葉松散る中に青 梅 萩原 芙沙
 改札を出て夕焼け鯛買って帰る 武蔵野 蓮見 徳郎
 白靴の別れ線 状 降 水 帯 小金井 平井 葵
 独白の多き日卓のデラウエア多 摩 平山 道子
 灯のすべて吾のものなる夜店かな 八王子 広井 和之
 収容所に唱ふ「ふるさと」 敗戦日調 布 藤原はる美
 名ばかりのいのち晒すや秋の風 練 馬 淵田 芥門

あけぼの集

柿花火ふっくらと書く後書き国 立前田 弘
 振り花今欲しいのは偶然国 立前田 光枝
 破蓮の風をいなして立ちにけり 国分寺 松井 彰子
 雲海を眼下に走る小海線 八王子 松元 峯子
 台風は日本が好きでござ迷惑 東久留米 三池 泉
 心身を痛めつけられ日雷 東久留米 三池 しみず
 酷暑避け高原ゴルフ良き友と 東久留米 三浦 禎三
 枯れさうな磯馴の松に新ちぢり 小金井 三浦 長閑
 抽出が伝言を囁む遠花火 世田谷 三浦 文子
 凌霄ゆらゆらコロナ禍未だ燻って町 田 三木 冬子
 参道を横切る蜻蛉午後の風 東大和 水落 清子
 草の丈毎に異なる虫の音か三 鷹 水野 星闇
 夏草の放埒父の老いにけり日 野 満田 光生
 歩くとは誰かに出会う草の花 昭 鳥 宮腰 秀子
 問診票ですでに反省みみず鳴く調 布 宮崎 斗士
 黙祷のあとの空白八月尽 国分寺 武藤 幹
 誕生時十月桜咲いてたと小金井 村井 一枝
 忘却の穴埋められず鰯雲熱 海 望月 哲土
 積乱雲くずれぬうちに旅支度 東村山 森本 由美子

駅ひとつあり夏空の忘れもの三 鷹 守谷 茂泰
 広い空雲を浮かべて秋となる町 田 山崎せつ子
 入日追ふ一本きりの日輪草 東村山 山崎美紗緒
 逆さみる死を耐えねばと猛暑なり府 中山本 徳子
 またひとり若き友逝く闇の雷 八王子 山本ひまわり
 鳴き惜しむ朝な夕なの秋の蝉多 摩 山本みつし
 空振りの野球少年汗光る調 布 豊 宣光
 東京に豪雨夾竹桃が赤い稲 城 好井 由江
 思うまま星々灯れ敗戦忌三 鷹 吉川 真実
 尼寺の木々の細枝を走る栗鼠 府 中 吉澤 利枝
 旧盆や傘寿の母の卵焼き 小金井 吉田さとみ
 半世紀の「一本の鉛筆」原爆忌 東久留米 吉平たもつ
 うだるやうな暑さに火照る地球かな町 田 米倉 信山
 向日葵を手折る敗戦忌の前夜立 川 米澤 久子
 ヒマラヤの岩塩けづる衣被小 平 我妻 民雄
 色変えぬ松の廊下に歴史あり青 梅 渡部 洋一
 ◇前号の米倉信山さんの作品に誤記がありました。
 お詫びして訂正させていただきます。
 日陰とて住み心地よし一輪草町 田 米倉 信山

青木 一郎

夏の夜オーロラ無音シンフォニー

吉平たもつ

三十六年前のこと、北欧を旅する機会があり、初めてオーロラを夜空に見上げることができた。ゆらゆら揺れてオーロラの織りなす変化は、無音のシンフォニーを奏でているようであった。自然界の不思議さを痛切に感じていた人生の一コマであった。

赤羽 四羽

ロック座へするりと入る荷風の忌

満田 光生

荷風には夜の街がよく似合う。その作品の多くも花柳界に材を採っている。いわゆる「不良老人」の洒脱な身のこなしが見える一句だ。毀誉褒貶はあるが、離婚後は独身を遁し、素人には手を出さないとという荷風なりの筋があった。

秋山ふみ子

ねじ花の表も裏も素顔です

飛永百合子

ねじ花の形態に、思うことをすっきりと詠まれていても感心しました。人の心には表も裏もあるけれど、下五の「素顔です」の措辞に救われます。明るさも感じられて好きな一句となりました。

安達 昌代

網戸の目くづれはじめて母の声

大石 雄鬼

久しぶりに帰省した実家での景であろうか。眺めるといってもなく夕風の先の網戸に目が留まる。景色を僅かに歪ませて網戸の目が乱れている。そこに被さる「母の声」に母の老いを感じ取る作者。静かでない親子の情景である。

新井 温子

薔薇はバラ私はわたし又明日

宮腰 秀子

一読して、とても共感を覚えた句です。スカットと気持よく詠まれていますね。「又明日」の又がとても前向きで、作者の強い精神力を想います。私も、たくさん力をいただいた気がしています。

有原 雅香

介護と別居と離婚と日傘くるくると

宮崎 斗士

切実な社会問題である介護。病状と並行する様に、今まで築いて来た平凡な日常が奪われて行く。重たい主題を作者は、単語を並列する事で淡々と述べている。「日傘くるくると」の季語が絶妙であり、憫笑さへ含まれている様で悲しい。

石原 俊彦

夕焼雲帰りのバスを待つっている

尾崎 太郎

電車を降りて駅から少し歩いたところのバス停。いつもは所在なく辺りを見回しながら家までのバスを待っているが、ふと西の空を見上げると茜色に染まった夕焼雲が目飛び込んできた。その美しさに暫し見とれ、時の過ぎるのを忘れていた。

岩佐ひすい

辛夷咲く空を個室と思うとき

守谷 茂泰

空にいつぱいに咲く辛夷の花。この花は私のために、この空は私だけのものと思う作者の心情が垣間見えました。空を個室と思うとは発想豊かで、雲も、風も、飛ぶ鳥も、夜の星までも個室の中に取り入れ、色々な物語が始まるようで楽しいですね。

江中 真弓

桜桃忌公園の象いなくなり

大槻 正茂

象のはな子は昭和二四年にタイからやってきた。井の頭動物園で生涯を閉じたが、時代を共にした私たち戦後育ちの寂しさと喪失感は大い。太宰治もはな子も武蔵野に眠る。昭和へのこよない郷愁に打たれた。

大井 恒行

蛍よ今も地球は青いのか

田村 明通

たまゆらの蛍、蛍光色の青い点滅は、あ
たかも何かを訴えているようですらある。
人類によってすっかりその秩序が破壊され
ようとしているのだ。かつて「地球は青い」
といった宇宙飛行士の言葉は、警鐘のよう
に聞こえている。

大西 恵

透きとほる少年の声柿若葉

秋山ふみ子

少年たちが合唱しているさまが目の前に
浮かびました。まだ声変りしていない少年
たちのアルト、ソプラノといった声は、清
らかで透き通っていて美しい。それが、や
わらかで美しい色の柿若葉と見事に呼応し
ていると思いました。

岡崎たかね

逃水や真実隠すカタカナ語

根岸 操

20世紀までに2万語以上のカタカナ語
が日本語に入り辞書もあるが、リベンジ、
レジェンド、ガバナンス、リスベクト、アー
カイブともなれば……。日本語を避ける人も
いれば日本語訳の一語で充分とも限らな
い。「逃水」という感覚がびったり。

小川 葉子

廃校のタイムカプセル霾晦

青木 隆

タイムカプセルは卒業記念に埋められ
る。二十年后に掘り出し、同窓会に花を添
えることになる。近年、少子化や災害等で
「廃校」が重い。校庭そのものが現存すれば、
めでたしめでたしだが。霾晦も発祥の地の
歴史を運ぶタイムカプセルでもある。

尾関 英正

人間の弱さ味方に燕の巢

永井 潮

発想が自然中心の素晴らしい一句。燕が
子育てする姿は愛らしいのですが、この
捉え方が「人間の弱さ」かもしれませぬ。
燕は人間のこんな考えを「味方に」安心し
て子育てをする。私達には皮肉ですが、句
から燕の真の姿が垣間見えるようです。

河 順子

ねじ花の表も裏も素顔です

飛永百合子

ねじばな（捩摺）が大好きです。雑草とし
て刈られがちですが、視線を下ろすと、小
さいきれいなランの花が、双方向に咲いて
いるのです。虫を引き付ける形なのでしょ
う。かつて訪れた鎌倉の東慶寺には、ねじ
花だけの囲いが大切にされていました。

川島 一夫

みんなみんな死んじまったよ葛の毘

吉澤 利枝

みんな死んじまったとは非日常的な言葉
で、今の私には好みではないが、「みんな
みんな」と重ねられると高齢者の眩きに聞
こえ「葛の毘」で作者だけの実感ではない
と思った。

川名つぎお

亡き民とわが民乗せて飛ぶ螢

大井 恒行

列強からアジアを解放する聖戦を口に、
祖国は弱肉強食の体質を拡大へ、アジア諸
国を略奪した。この戦争は同質体制からの
共食いであった。今、亡き民（アジア人）
とわが民（明治・大正生れ）は闇夜に光る
螢火と化して、祈りの時間をさまよう。

幸村 睦子

夕焼雲帰りのバスを待つっている

尾崎 太郎

作者はどこに行かれたのでしょうか。だ
れかと会われたのでしょうか。夕焼雲が作
者をなぐさめているような、日本映画のワ
ンシーンを見るように心に沁みました。バ
スが電車だとしたら詩になりませんでした
ね。

城内 明子

逃水や真実隠すカタカナ語

根岸 操

昨今殊に多いカタカナ語。そのキラキラ感、漢字と異なり表音文字のカタカナ表記等により善意悪意に関わらず真意が伝わり難く意図せぬ方向へ誘導し、真実を隠す季語「逃水」の斡旋が見事。尤も「老人席」なる「シルバースhirt」は有難いけれど。

佐藤 栄子

祝宴のシャンパンはロゼ若葉の夜

石川 春兔

お祝いを受けているのは果して女性か、男性か。熟年か、若者か。どちらにしても若葉からどんな色に染まり秋になるのか。ロゼのやさしい色に作者の心情が含まれ、こちらまでが心温もり頂きました。

佐藤 光子

みんなみんな死んじまったよ葛の畷

吉澤 利枝

八十歳を過ぎると親しい人達、特に幼友達の記事は「うたよ」と置き去りにされた気持ちになる。まして葛畷を作り気を感じた男の子の死去なら、私は「死後生」を信じている。思い出すのは供養になること。先逝った人達に貴女は歓迎されるでしょう。

清水 弘一

ほうたるを包むかたちやにぎり飯

三浦 文子

関西転勤を機に、週末古跡巡りや山登りを始めた。早朝のおにぎりは自分で作る。丸や三角のおにぎりは出来ないで、いつも依型のものとなり笑われた。今ではふわりと旨いと好評である。ほうたるを包む柔らかかな力加減で握れるようになっていく。

柴 れいこ

ねじ花の表も裏も素顔です

飛永百合子

人として正しく生きようとしても、時には本心を隠したり偽ったりせざるをえない時もある。しかしねじ花は常に本当の自分の姿を見せている。この句の「素顔です」がとてもいい表現と思った。作者の観察力、感性の豊かさを感じた。

鈴木 浮葉

枇杷の実を月のしづくのごと吸る

江中 真弓

いいですねー。枇杷の実のあの薄甘さ。寂しいような薄甘いジュシーな実を味わい吸る作者。それを「月のしづく」と喩える感性。魅せられます。確かに枇杷の実の色も形も月に似ています。移ろっていかざるをえないさまたまなものを思えます。

鈴木かずえ

薔薇はバラ私はわたし又明日

宮腰 秀子

今、世界的に叫ばれている「多様性」。週つては孔子の「和して同せず」禅の「日々新たに」等々が一句の中に美しく整えられている。秀句として崇めたいと思います。作者はきっと生き方の達人なのでしょう。私も心してあやかりたいと思います。

鈴木 寿江

ありのまま生きて米寿や四葩咲く

飯田 玉記

紫陽花、四葩は七変化とも云う。美しく咲き始めてから枯れるまで七色変わると云う。人生も榮あれば、苦もある。それをありのままに生きて米寿を迎えました。素晴らしい。これからもありのままに長生きしてください。

鈴木 佑子

暑き日の人にしがらみ本に帯

城内 明子

人にはしがらみ本には帯と、本体を縛るものは確かに煩わしく、暑い日はより暑さを感じさせる。確かにと同意できるが、人から本に比較をとばすのはあるようでない。歯切れのよいリズムが効果をあげている。

諏訪部典子

守宮語の分かる母逝くひとりぼち

栖村 舞

守宮の出るような古い一軒家にての母子の二人暮らし。守宮がでると「守宮さん今晩は」などと声をかけるお母さん。そんなユーモアのあるお母さんが逝かれ独りぼち、どんなにか寂しいでしょう。「鳥語」などではなく「守宮語」ならではの句。

関 梓

ぬけぬけと年を偽るサングラス

佐々木克子

私達は高齢化社会の真ただ中にある。衰えゆく記憶と容色に鏡を見るのも辛い。「ぬけぬけと」にユーモアと俳諧味があり、明るい気持ちにさせてくれる。オードリー・ヘプバーンのようにカッコ良いサングラスをかけて、徘徊でなく俳諧を楽しみたい。

芹沢 愛子

秒針で計れぬ夜や桜降る

吉川 真実

秒針で計れば「桜散る」の従来は無常感に通じる。この句は秒針では計れない夜である。花吹雪がいつまでも降り続けるような幻想的な世界を想わせて美しい。時間という概念を改めて考えてみた。

谷村 綱夢

緑さず書棚の隅の若菜集

尾関 英正

この季語に、この分かりやすい青春詩集、いいよね。「隅」というのも、今となれば恥ずかしさもあるけれど抜くことはできない、そんな心情。分からなくても差しておき、「人生論ノート」(三木清)とか「いきの構造」(九鬼周造)とかも、あつたけどね。

玉木 康博

祝宴のシャンパンはロゼ若葉の夜

石川 春兔

とても晴れやかな気分になる句でした。シャンパンのはぜる音が聞こえ、夜の庭には若葉が明りに映え淡き色のロゼと、宴の情景がよくわかります。きつと良き二人の出發の記念日になったでしょう。

玉木 祐

あの頃の「暮しの手帖」夏帽子

関 梓

この本は今も出て居るが「あの頃の」と読者に委ねている。初版本は懐かしい花森安治の装丁編集で戦後とても斬新だった。夏帽子の作り方も記載、私はとてもお世話になった愛読書だ。一読若き日に戻り引越して処分した一世紀の版を思い浮かべた。

戸川 晟

犬に天寿木香薔薇はいま盛り

稲吉 豊

地球環境に異変があると言われて久しいが、犬は天寿を全うし、木香薔薇はいま盛りである。世は事もなし。このまま推移すれば私も天寿が全うできそうだ。そう願いたいものだ。毎日暑いがほつとしますね。

飛永百合子

人間の弱さ味方に燕の巢

永井 潮

人間の強さは優しさでもあり、言い換えれば弱さでもある。自然界の動物はそうではなく燕はその生態をよく知っていて、家の軒下や駅構内によく巢を作る。人は大事にそれを見守っている。それに気付いた優しさは作者の優しさでもある。

成戸 寿彦

谿若葉古城めきたる発電所

諏訪部典子

一読、季語が大変よく働いている句と思えました。谿という地形、若葉という若々しい緑。それに対するのが古城のようだという古びた、しかしとっしりとした発電所。若葉に引き立てられるように、その存在感を際立たせています。

西前 千恵

その先は極上の笑顔ヒアシンス

戸川 晟

導入部分の「その先は」に作者が最近出版された第三句集『それから先は』があり「その先」は「極上の笑顔ヒアシンス」です。これからも人生を楽しみ極上の笑顔でヒアシンスの青紫黄白で色どり明るく前向きな人生をとの意志表示のお句と思います。

西村 智治

辛夷咲く空を個室と思ふとき

守谷 茂泰

空を個室とは、少しわからなさがあるようだ。ただその、わからなさそのものが、辛夷の白さと、りりしさをよりくつきりと浮び出させることに成功している。作者の思わくは、わからないが、辛夷をすく人は、好い人であるはずだ。

根岸 敏三

遠くより山鳩の声原爆忌

萩原 美沙

広島は八月六日、長崎は八月九日が原爆忌ですね。
広島は十四万人、長崎は七万四千人の犠牲者が出ました。
この句の「山鳩の声」を平和の声と受け取りました。

萩原 美沙

憂きことは地に置き夏の観覧車

吉村春風子

昭和三十年頃は、盛夏で三十度になると暑い連発で、文化生活には程遠い時代でした。現在は高齢者にとり、便利過ぎて不便で、ついて行けない事を感じます。ゆつくり廻る観覧車から見下ろす下界、憂き事のすべてを解消された作者が浮かびます。

広井 和之

亡き民とわが民乗せて飛ぶ螢

大井 恒行

歴史の興亡の中で、滅亡し遺跡や伝承を残している民がある。日本も、先の戦争で国家と民族の破滅の瀬戸際を経験した。螢は、すべての民をそのたましいの光に乗せて飛ぶ。重くて深い鎮魂の詩が迫ってくる。

淵田 芥門

春雷や天神地神のジャムセッシュン

蓮見 順子

夏の雷神風神に対し、春の訪れを喜ぶ天神地神のさまを、ジャズ用語、ジャムセッシュンと比喻。春は轟雷ではないので、サククスもペットもないピアノトリオあたりがリリカルに奏で、万物がスイングする。堅り上中句が下句の奇抜な比喻で効果的だ。

三浦 楨三

新茶容れ作陶の壺耀けり

神崎 幸子

俳人は茶道陶芸に精通を極め、日本文化を理解してきた。これらの奥の深さに感じている一句である。要は茶道・陶芸の世界は昔ながらお茶屋さんである。昔ながらのお茶屋さんに行くと、それなりに垣間見る事が出来る。

三浦 文字

夏雲や礼をするとき足揃へ

遠山 陽子

礼とは何か？知り合いと出会った時の礼、いただき物への返礼の礼、教室での礼等々、日本社会には「礼」が溢れている。掲句の季語「夏雲」の斡旋により、私には何故かこの礼は、戦時中のピツタリと足を揃えた兵隊さんの敬礼に思えてならない。

水野 星闇

枇杷の実を月のしづくのごと啜る

江中 真弓

枇杷の実は、食べるのか齧るのか、はてまた啜るのか、歳時記で如何なる動詞が使われているのか改めて調べてみた。実の割には種が大きいので、やはり啜るのが一番フィットすると合点した。さすが俳誌「暖響」の選者に相応しく、中七が実に印象的。

山滴る石上から山の辺へ

石原 俊彦

満田 光生

巨大な「おやさとやかた」が建ち並ぶ天理市街地を抜け、閑静な古社・石上神宮に至る。ここから北は春田山、南は三輪山までが日本最古の「山辺道」、古墳・古社が点在。古代大和政権の権力闘争は遥か昔、山々の瑞々しい生気が人の心を癒やす。

望月 哲士

暑き日の人にしがらみ本に帯

城内 明子

人は誰しも何らかのしがらみを持っていく。そして本の帯をしがらみと見立てた発想の転換に感嘆した。本の帯は確かに有益の面もあるが、いざ読み始めたりすると案外邪魔になる。汗を拭つても身から削ぎ落せぬ「暑き日」の鬱悶気を表現して抜群。

山崎美紗緒

ぬけぬけと年を偽るサングラス

佐々木克子

ある年齢を越すと少しでも若く見られたくて、年齢をサバ読む。サングラスのマジックにかけられたように——。一つ二つさば読んで平然としている。そんな女性に可愛さを感じるこのごろである。

みんなみんな死んじまったよ葛の畷

吉澤 利枝

山本 徳子

生者必滅とはいうが、人の死は深い悲しみがある。父や母、兄妹、又、逆さを見る親より先立つ事もある。青々と伸びている葛に畷があったのだ。どうにも悲しい心境だ。ご冥福を祈るばかりである。

山本ひまわり

ありのまま生きて米寿や四葩咲く

飯田 玉記

「ありのまま生きて」の言葉に胸が騒ぎました。背伸びして取り繕って遣り過してきた自分の来し方が浮んできます。苦しいです。残る年月をそんなふうに生きたい。素直に己れに向き合おうと思いました。短冊に書いて机の前に貼りました。感謝。

米澤 久子

ほうたるを包むかたちやにぎり飯

三浦 文子

季節がめぐってくると蜜が飛んでいるものと、過していた日々を懐しくふり返っています。おにぎりを結ぶ手、そうです。掴えた蜜を柔らかく包んだ両の手と同じ形でした。今迄気付かなかったとは。此のあたかいたかい俳句を詠んだ作者に感謝です。

手を離す稚児の一、二歩夏来る

西前 千恵

渡部 洋一

此の間まで、孫が生まれた話をしていましたが、もうヨチヨチ歩きですか。月日の経つのは早いですね。季節も佳し。目にするものには興味を示し、外へ出たがりです。またの様子を聞かせて下さい。「手を離す」の表現も佳し。

第6回 俳句研究会

6月22日(土) 立川市子ども未来センター

担当幹事 戸川晟・秋山ふみ子・

佐々木克子・石橋いろり・

大森敦夫・尾崎太郎・根岸操・

青木隆

参加者25名

★講話なし

身ひとつで生き抜く術や蜘蛛の糸 松井 彰子

未来より今が大事よ額の花 飯田 玉記

洗ふ墓失せて故郷の闇しづか 水野 星閣

路地裏はゆつくり暮るる額の花 秋山ふみ子

短夜の既読はいまだ付かぬまま 田村 明通

五本指ばつと開ける素足かな 関 梓

人の世のはずれに蜜湧きにけり 尾崎 太郎

葉桜や誰に知らそか墓じまい 小野こうふう

七変化カフカのようにめざめた朝は 石橋いろり

少年の妄想りんりん雲の峰 戸川 晟
 白扇子一拍置いて白い嘘 稲吉 豊
 もういいかい 声の聞こえる梅雨晴間 石原 俊彦
 骨董市昭和は遠し夏落葉 根岸 操
 枇杷の種黒き瞳に見つめらる 佐々木克子
 九条の看板の下燕の子 高瀬多佳子
 どくだみも元氣良過ぎて嫌われる 松元 峯子
 梅雨の夜の階きざしきしむ茅舎かな 淵田 芥門
 入梅や手持ち無沙汰の休刊日 西前 千恵
 子鴨ら餌となる眼前の戦場 山本ひまわり
 イスラエル大使館前梅雨滂沱 青木 隆
 馬になるべく胡瓜の花は咲きにけり 大森 敦夫
 郭公の声聴きながら山を見る 山崎せつ子
 箒持つにここに地蔵若楓 根岸 敏三
 切支丹殉教の地よ青葉潮 三浦 長閑
 蜂の巣めく部屋にて仰ぐ夏至の月 亀津ひのと

第7回 俳句研究会

7月20日(土) 立川市子ども未来センター
 担当幹事 満田光生・秋山ふみ子・
 玉木康博・根岸操・青木隆・
 石橋いろり・山本ひまわり

参加者22名

★講話なし
 天寿までてんくるくるあめんぼう 石橋いろり
 独り居のそつと紅引く盆の入り 淵田 芥門
 校正の海泳ぎけり熱帯夜 満田 光生

不器用に生きて昭和の冷奴 戸川 晟
 大切な昨日がありし木槿掃く 根岸 操
 迷惑なものに告白カンナの朱 小山 健介
 診察券財布に増えて晚夏光 高瀬多佳子
 旅靴しづかに拭ふ晚夏かな 秋山ふみ子
 水茄子の歯ごたえ耳に母想う 玉木 康博
 縁涼し放屁咎むる人もなし 稲吉 豊
 輸送機の巨腹頭上を梅雨晴間 亀津ひのと
 牛蛙と互いに知らん顔をして 尾崎 太郎
 骨たたまむことの拙き燕の子 大石 雄鬼
 天に咲きなほ天を見る合歡の花 山本ひまわり
 三代の集ひて囲む大西瓜 田村 明通
 日焼の子ペットボトルの水被る 三浦 長閑
 囀も入れて豊んだ男傘 水落 清子
 之繞のごとく寄せ来る土用波 大森 敦夫
 背中の汗以下同文の感謝状 小野こうふう
 鴨の子の親の後ろを一列に 根岸 敏三
 屋根たたくドレミファソラシドタ立 西前 千恵
 国籍を問はず肩組むビール祭 青木 隆

第8回 俳句研究会

8月24日(土) 立川市子ども未来センター
 担当幹事 満田光生・秋山ふみ子・
 玉木康博・山本ひまわり・
 石橋いろり・亀津ひのと

参加者25名
 青木隆・尾崎太郎

★講話なし
 赤蜻蛉少し飛んでは考える 根岸 敏三
 捨つる本十字に結ぶ秋思かな 秋山ふみ子
 帰省子の光と風の通る部屋 戸川 晟
 打水や寺町三条西上ル 淵田 芥門
 言の葉は今も直球生身魂 稲吉 豊
 蟬の声とつと途絶えて六日朝 三浦 長閑
 象を見し後はラムネの玉の音 小山 健介
 山の唄いっばいつめて胡桃の実 水落 清子
 破れ蓮の風をいなして立ちにけり 松井 彰子
 やはらかき言葉もて訪ふ新盆会 水野 星閣
 敗戦忌増加止まらぬ戦災孤児 青木 隆
 西瓜割る地球びくともしないけど 佐々木克子
 社会人の顔する孫の盆帰省 西前 千恵
 夏帽子名前浮かばぬ古写真 関 梓
 盆用意継ぐものもなくなんとなく 石橋いろり
 風すこしあたりに増える赤とんぼ 山崎せつ子
 葡萄買ふ道の駅にも新紙幣 大森 敦夫
 かき氷富士山の形阿蘇の形 田村 明通
 かなかなや夜明けの風のぬるきこと 山本ひまわり
 日盛りを夢の如くに百日紅 亀津ひのと
 母の忌の済みぬ太々天の川 満田 光生
 青空と青芝の間風と黙 石原 俊彦
 おもだかの咲ける谷戸田の夕まぐれ 尾崎 太郎
 再会の阿修羅像や繁る奈良 玉木 康博
 夏の蝶ブルーラインのふわゆらり 高瀬多佳子

初夏の吟行会（正福寺と菖蒲祭）

令和6年6月1日、梅雨晴れの東村山駅に十七名が集合。足に自信のない方はタクシーで先に。住宅街を抜けて、国宝正福寺へ。こぢんまりとした境内だが、鎌倉の円覚寺を彷彿させる風格のある禅宗仏殿があった。こけら葺きの屋根の四隅の見事な反りに皆、驚嘆していた。また、地藏堂には、千体地藏が収められていると言われ、地藏堂脇の棚に木彫りの二百体程の小地藏があった。厄払い、疫病退散の願いをこめて供えられたと聞く。いずれの時代も子思い仏に祈り継る気持ちは同じだろう。折しも、正福寺のガイドさんの説明を便乗して聞くことができ、しばし皆でお勉強。そして、いよいよ菖蒲園へ。

狭山丘陵を背にした菖蒲園。丁度この日から菖蒲祭がオープンし、花菖蒲が咲き誇っていた。三百種八千株百万本咲いていたのかは確かではないが、花



吟行句最高点・根岸操さん

それぞれの木札を確かめつつ楽しめた。出店の五平餅や焼きそば、団子などを頼張りながら個々に散策。四阿では、偶然居合わせた方と俳句談義となったり、それぞれ句作りにまつたりとした時間を過ごした。

句会場は駅直近の東村山市サンパルネの広いコンベンションホール。和気藹々とした中で句会は進み、表彰は上位7人。東村山と言えば、志村けん。「だいじょうぶ



吟行句会のメンバー

だあ饅頭」や「だいじょうぶだあどら焼き」などの賞品が渡された。

アフターは、同じビルのカフェレストランイルソーレで。盛り沢山の一日だった。

(石橋いろり)

初夏の吟行会作品

上位入選七句

善行橋渡れば善人立葵 根岸 操
御朱印の自販機もあり麦の秋 尾崎 太郎
だんご屋の忙しく煽る洪団扇 石橋いろり
花菖蒲色とりどりの風を呼ぶ 亀津ひのとり
夏雲を置き正福寺の屋根のそり 西前 千恵
地藏堂反る軒先は夏空へ 水野 星閣
ざり蟹を釣るチビツ子の顔光る 石原 俊彦

一人一句

むらさきはかなしみの色花菖蒲 秋山ふみ子
国宝の寺を巡りて花菖蒲 笹木 弘
菖蒲よりメダカに夢中子も父も 森本由美子
菖蒲まつり小町娘の生一本 戸川 晟
国宝やガイド背後の濃あぢさゝ 大森 敦夫
蛙鳴くそばの水草揺らしたり 根岸 敏三
さくらなる名をもらひたるあやめぐさ 山本ひまわり
里のなかに皺の生まれて菖蒲咲く 大石 雄鬼
幾星霜小地藏並ぶ初夏に見ゆ 玉木 康博
薫風や威厳をそなえ正福寺 松元 峯子

あけぼの便り

- 毎月の俳句研究会ですが、講話をして下さる方が減っております。その時間を交流の場として有効な時間になるよう努めておりますが、会員相互で育む時間になればと思っております。最近、お薦めの句集とか、ご自分やお仲間の句がどこの雑誌とか新聞に掲載されていたとか、感動した本とか、美術展の耳より情報とか。多くの方の耳と目により、プラスの時間にできればと思いますので、ご協力ください。
(石橋いろり)
- ご縁があり京都からお世話になっていきます。どうぞよろしく。
(岩佐ひすい)
- 猛暑の中ご苦勞をお掛けします。
(内田牧人)
- いつもお世話様です。宜しくお願ひいたします。まだ〳〵暑い日が続いております。ご自愛下さいませ。
(大谷みどり)
- 「陸」の編集として忙しくしております。投句同様原稿もパソコンよりデータ原稿として処理できる日待ち望んでいます。
(小川葉子)
- 猛暑にめげず週一、二回老々テニス頑張っております。
(亀津ひのとり)
- 夏風邪をこじらせ、おそくなりました。とをお詫びします。
(河 順子)
- 俳句で学んだ有季定型は、同時に無季自在の深さだった。その恩恵か頭だけは自分では、まだ鋭く冴える方向もあるが、人に会うための外出が面倒になった。この秋八十九歳になる。
(川名つぎお)
- 小野こうふう様、平山道子様、武藤幹様前号にて拙句をご講評下さり有難うございました。嬉しく拝読させて頂きました。句作は益々覚えない日々ですが、皆様のお仲間に入れて頂き、作品・講評等に接する事、学ばせて頂く事を愉しみにしております。
(城内明子)
- 「もう年だから今年が最後ね。」と言いつつも、毎年梅干しを作る母、来年もよろしくね。
(小泉満知子)
- 猛暑に完全に参っております。思考能力ゼロ。とにかく倒れぬよう、そればかりです。
(佐々木克子)
- 新執行部の皆様お世話になります。よろしくお願ひ致します。
(佐藤光子)
- 宮腰秀子様、前号にて拙句をご鑑賞いただき有難うございました。今年はこのほか暑く老体には堪えがたい毎日です。早々に涼風が待たれます。季節柄皆様ご自愛なされ、益々の協会のご発展をお祈り申し上げます。
(鈴木かずえ)
- 九十一歳の老齢には厳しい暑さです。
(諏訪部典子)
- いつも有りがとうございます。暑いのはわかっているけれど「立秋」のことばはとても美しくたのしいです。この頃季語のすばらしさに脱帽です。お大切に。
(高原 桐)
- 猛暑の中スタッフの皆様いろいろ会の為のお仕事感謝申し上げます。どうぞお体おとい下さいませ。
(玉木 祐)
- いつもお世話になりありがとうございます。これまでにない猛暑が続き、一人一人が熱中症に気をつけなさいといけませんね。
(飛永百合子)
- 尾崎太郎様、松元峯子様、村井一枝様、前号で拙句をお採り上げ下さり有難うございました。お陰様で暑い夏をどうにか乗り切ることが出来ました。
(永井 潮)
- 三十五度以上が当たり前の日々です。暑さが怖くて外出は午後五時以降に近くのスーパーに行くだけの日々です。当然足腰が弱り、吟行会にも行けなくなりまして。皆様はお元気ですか？
(中田とも子)
- 「多摩のあけぼの」、いつも楽しく拝見させていただいております。またこのたびは一句鑑賞の機会を与えてくださり、

誠にありがとうございます。素晴らしい句が多くいつも迷いますが、一句鑑賞させていただきます。今後ともよろしく指導くださいますよう、お願いいたします。
(成戸寿彦)

○相変らず危険な暑さが続いております。どうぞご自愛専一の程お祈り申し上げます。
(西川五月)

○大森敦夫様、句評ありがとうございます。うれしかったです。
(西村智治)

○三池しみず様、拙句を取っていただきありがとうございます。近くの川に川蟬が増えました。散歩が楽しみになります。
(根岸敏三)

○前号掲載の陽春句会では、思いがけぬ榮譽をいただき、ありがとうございます。「多摩のあけぼの」は、毎号好きな句を探して参考にさせていただいています。「一句鑑賞」ではなるほどと思うことしばしばです。今後とも、よろしくお願いたします。
(野口佐穂)

○自然に触れ、静かな時間の中から俳句と向き合い、生き甲斐を感じております。
(萩原芙沙)

○関係者のみなさまいつもご苦労様です。きびしい夏はいつ終るのでしょうか。「多摩のあけぼの」一五二号が届く頃に

は秋がやって来ているかと思いたいです。
(前田光枝)

○家事は涼しい時間帯にと心得て四時起床、熱中症に注意のこの夏を乗り切りたいとがんばっています。家に居ても俳句ができる幸せ。
(三木冬子)

○鳥彩可様、前号で「日に一度」の拙句を鑑賞して頂き有難うございました。これからも小さな事、物へ目を向けて俳句が詠めたらと思っております。山崎せつ子様、長い間お世話になりました。本当にお疲れ様でした。
(水落清子)

○所屬誌「岳」で、八月より「話題の句集一句鑑賞」の連載を担当することになり、俄勉強で著名俳人の句集をあれこれ読んでいます。通常の句集とは句の「格」が違うというのが実感。いい句集を読むことの大切さをひしひしと感じます。
(満田光生)

○「八月は六日九日十五日」に日航123便墜落事故も八月十二日、また私の母も若くして亡くなったのが、八月十日でした。私の生まれた月でもあるのがなんとも複雑です。
(武藤 幹)

○いろいろお世話になり有難うございます。ハガキで投函させて頂きましたが、メールの方が校正も不要と思われそうです。

で、今後はメール送信でよろしいでしょうか。
(望月哲土)

○今年猛暑続きで、熱中症にならないよう気をつける毎日でした。猛暑は全国的で七月後半に八日間程郷里の北海道へ帰省した折も連日三十五〜七度の猛暑続きで「日本全国暑いのだなあ!」と実感いたしました。
(吉川真実)

○病気をして一年以上。まだ健康にはなれませんが頑張っています。
(吉澤利枝)

○冬木喬様、前号で拙句「また一つ廃校が増え竹の秋」をご鑑賞いただきありがとうございます。大先輩に取り上げて頂き、またく遣る気が出てきました。青木様、色々お手数をかけます。私も編集の経験がありますので、そのご苦労ぶりが解ります。
(渡部洋一)

○副幹事長だった大友恭子さんが亡くなられました。立川市にお住まいで、俳句研究会の会場「子ども未来センター」の使用手続き等を長年にわたり担当して頂きました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。
(永井 潮)

※本欄は皆様から頂いた葉書の通信欄の文章です。紙面や編集の都合で一部を割愛したり、句読点や語句を変更する場合がありますのでご了承ください。(編集部)

事務局だより

○当協会のお知らせ等はホームページからもご覧になれます。「速見幹事担当」「現代俳句協会」を検索し、「地区活動」から「関東ブロック」の「東京多摩」へと進んでください。

★第42回東京多摩地区俳句大会

日時 令和6年11月4日(月・祝)
会場 武蔵野スイングホール
(JR武蔵境駅北口)
講演 秋尾 敏先生
「碧梧桐と虚子——現代俳句のルーツ」

★令和七年度定時総会 並びに陽春句会

日時 令和7年3月1日(土)午後1時30分
会場 東村山市サンバルネ2F
コンベンションホール
(西武新宿線/国分寺線)
東村山駅西口徒歩1分
出句締切 1月31日(金)
(詳細は別紙をご覧ください。)

★会員の現況(9月末現在)

218名(正会員171名・一般会員47名)
☆新入会員 1名(敬称略) *印は正会員
*岡村直子(羽村市)
(前号で紹介の彰穂(松井彰子)さんは一般会員でした。)

◆多摩地区協へのご入会は、随時受け付けております。現代俳句協会でも多摩地区に在住の方は、会費は無料(新規入会の方は申し込み手続きが必要)。
その他一般の方は年会費2千円です。

お問合せ、ご連絡は事務局(下欄枠内)まで

「多摩のあけぼの」編集担当幹事

青木 隆(隆) 満田 光生(光)
飛永百合子(百) 永井 潮(潮)

俳句研究会

第11回 11月23日(土)午後1時

立川市子ども未来センター

立川駅南口徒歩13分

(とじ込みはがきの地図参照)
電話042・529・8682

第12回 12月14日(土)午後1時

立川市子ども未来センター

第1回 1月11日(土)午後1時

立川市子ども未来センター

(いずれも会費千円、出句三句)

○初めての方歓迎、見学も自由です。

原稿送り先の変更

「あけぼの集」の葉書の送り先と「二句鑑賞」原稿の送り先は前号から共に青木隆さんです。

郵便料金が10月から変わり、葉書の切手は85円になりました。貼り間違えのないようお願いいたします。

句や原稿はメールでもお受けします。アドレスは、

tamanakebono@googlegroups.com へ。

編集後記

☆152号よりあけぼの集を担当させていただきました。皆様、奮っての投句をお願いいたします。郵便以外の方法でも承ります。アドレス等は上記送り先の変更に記載の通りです。(隆)
☆俳句を始めて四十余年、未だに「若い人」扱いはされる不思議。結社・協会・紙メディアに拘らず、本当に若い人を俳句に呼び込む方法を真剣に考えねばならないと思う。(光)

☆九月後半になり急に気温が下がり出し、冷房でも充分効かなかった室温が25度位になって寒さを感じる程。夕方は長袖を羽織っている。健康上、研究会に出席出来ないのが寂しい。(百)
☆今までもずっとやってきた未投句の方への出句のお願いを、今回は青木さんが代わってやって下さりとても助かりました。葉書を出すのが面倒な上、切手代も値上げ。でも「あけぼの集」は本誌の要。ご協力を切にお願いします。(潮)
―題字は三橋敏雄氏―

令和六年十月三十一日発行

発行人 水野星間

編集人 永井潮

発行所 東京多摩地区現代俳句協会事務局

〒181-0015

三鷹市大沢2-1-07

大森敦夫方

TEL 090-9389-4821

E-mail hitemo@yhone.jp

印刷所

株式会社 清水工房

TEL 042-620-2626